

# 小樽市観光基本計画策定委員会 第三回委員会議事録

日時 平成 28 年 6 月 30 日(木) 14:00～16:00

場所 小樽市役所本館 2 階 市長応接室

## 次第

(1)開会 李委員長より開会の挨拶があった。

### (2)ワークショップの開催について

- 事務局より、基本計画の策定にあたって、より多くの市民からの意見を取り入れることを目的とした市民対象のワークショップの開催案について説明があった。(配布資料 1)
- 資料に基づいた流れで開催し、市民から自由な意見をいろいろいただきながら基本計画の策定に反映させていくこととした。「売れるモノ」という視点から考えると、観光客はどのように考えているのか、観光客目線の情報を参考資料として用意することになった。

### (3)小樽市観光基本計画に関連する国・道の計画について

- 国や道が進めている観光計画等について事務局から説明があった。
  - 「明日の日本を支える観光ビジョン」(配布資料 2)
  - 北海道観光のくにづくり行動計画の概要 H28.2(配布資料 3)

主な意見は以下の通り。

- 目標指数として観光消費額が示されているが、観光客数の数だけではなく、いかに消費させるかが大切で、今後は観光の質の向上を目指すべきだと思う。
- 国や道の計画に照らし合わせてみて、小樽が買い物中心の街になっていることや、「観るところがない」と言われることがある現状を踏まえると、小樽には地域の自然環境を活かした本当の意味で楽しめる観光地としての取組が必要だと思う。
- 国際情勢を考えると、インバウンドだけではなく、国内客のリピーターが増える魅力あるまちづくり、付加価値のあるまちづくりが必要ではないか。

### (4)小樽観光の現状と課題、目指すべき姿、方向性について

- 事務局より、前回の委員会で小樽観光の課題や目指すべき姿について出された意見をまとめた資料と他地域の観光振興の事例について説明があった。
  - 「小樽観光の方向性／議論のポイント」(配布資料 4)
  - 「久留米市の観光振興事例」(配布資料 5)
- 小樽観光の方向性とアクションプランづくりに反映させるために、配布資料 4 をもとに、

小樽観光の課題、目指すべき姿について追加すべきテーマや考え方などについて各委員から意見を伺った。主な意見は以下の通り。

○「試食」「客引き」などが堺町の一部で横行し、小樽が質の高い観光を目指す観点から見ると、違和感を感じている。

○住民がその地の歴史や文化を認識して、その良いところを見てもらうというのを観光の原点と考えると、市民の意識改革が大切である。

○国の観光計画を考えると、札幌や後志管内との連携なくして小樽の観光は考えられないのではないか。小樽は、観光としての地域とのつながりは弱い。これからは広域をキーワードにして考えて、小樽らしさのある新しいもの、世界に通用する魅力を打ち出していくことが不可欠だと思う。

○広域連携は重要。広域連携のDMOを国がやり始めたが、そのプラットフォームを構築する必要性を感じる。戦略的には広域圏にある統一的なテーマが必要。それによって近隣自治体を巻き込んだ展開が可能になる。

○後志の連携で考えると、ワイン、道産酒などがあるので酒を中心にして、それにあう地元の食材を組み合わせることなども大きな魅力だと思う。地元の強みである食材を活かした観光ルート開発が考えられる。

○小樽の生活、文化、風習を伝えるという視点で小樽らしさを訴求するという意味で“異日常”というテーマはどうか。

○ニセコは国際化のゲートウェイになりつつあるので、そこから小樽に来てもらう工夫はどうか。外国人をターゲットに、IT と観光の融合を図った、「ひとりで歩けるまち」というようなコンテンツが必要だと思う。

○小樽だけでもっと魅力を発掘して稼げる観光地を目指してほしい。小樽がひとつのディズニーランドで、いろいろなルートを組み合わせて小樽の歩き方、小樽らしさを見い出していくという発想。

○小樽の中だけでの連携というのもいろいろ考えられる。小規模なコミュニティ、町内会などに目を向けることで、どれだけ市民を観光に巻き込めるかが大事では。また、ビジョンには目標数字などを入れ、市民にもわかりやすくすることも必要ではないか。

○異文化を知ることが幼いころから体験できる機会があるので、接客の体験や外国人を知る体験など学校のプログラムと観光を結びつけることができれば、より小樽らしさが出せると思う。

○高齢者も意欲的な方が多いが、若者が主体でなければまちづくりは進まない。そのための人材育成として学校のプログラムと観光を結びつけるのはいいと思う。

○ホンモノの小樽という点では、歴史や文化が重要になってくるが、「歴史」と「観光」の管轄部署が違うが、うまく連携していくことが大切であると思う。

●最後に、森副委員長より全体を通した感想があった。(以下)

市民参加、市民の意識改革など、観光をテーマとするときに市民の参加を促す、地域のまちづくりと観光の連動性を考えていくことが重要だと思う。品のない街にしたいというのはその裏返しであり、それこそがホンモノの小樽だろうと認識している。

広域観光でいうと、小樽はもともと広域的な経済圏の中心にあったと考える。小樽が繁栄していくためには広域観光は考えていかなければならないと思う。産業構造が変化している中で、新しい広域のイメージを作っていくことで持続的な発展につながっていく。その意味で、DMOのプラットフォーム構築は方向性の一つとして考えていきたい。

(注) DMO

Destination Management/Marketing Organization の略。観光物件、自然、食、芸術・芸能、風習、風俗など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域作りを行う法人のこと。観光庁が規定した日本版 DMO は以下の通り。

『地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人』

(10) 閉会

委員長より、次回の日程を確認し閉会した。

<次回委員会 8月29日(月) 14:00～/小樽市役所別館3階第2委員会室>